

スタンダード研究会会報

(1998) No. 8

1998.05.30

目次

○研究会発表要旨	1-9
○特別報告	10-11
○書評	12-19
○インターネット版情報誌 Le Courier Stendhal 創刊のお知らせ	20
○会員研究活動報告	21-22
○会員名簿	23
○編集後記	24

ポーリーヌ・ベール像について

岩本 和子

邦訳のない、スタンダールことアンリ・ベールの大量の書簡の中から、特に10～30代の若い時期に頻りに書かれた故郷の妹ポーリーヌとの手紙を紹介しつつ、のちの大作家の思想・文学の形成過程を辿る試みを現在行っている。それは同時に、従来「凡庸な」「兄の期待はずれの」と形容され殆ど顧みられることのなかった妹ポーリーヌを、兄との関係において、またひとりの意思を持った「新しい女性」として描き直す試みでもある。本発表では、これまで青山社刊『流域』誌上に発表した拙論のまとめと今後の展開を紹介し、ポーリーヌ・ベール像の輪郭を描いてみた。

1) 兄から妹への手紙は、アンリが故郷グルノーブルをあとにしパリ上京を果たした1800年3月9日に始まる。作家としては晩成型のスタンダールにとって手紙や日記は青年期の「作品」とも言える。特に手紙は「読み手」を意識したテキストであり、その理想的な「読み手」のひとりであったテキスト上のポーリーヌ像をも浮き彫りにする極めて興味深いものである。兄妹の状況、発信地や発信時期の変化を基準にして、二人の関係やテキストとしての書簡の変化を追って行くことになる。書簡集としては主にブレイヤード版、ディヴアン版を参照した。最大収録数の前者発刊の時点においては、アンリからポーリーヌへは281通、ポーリーヌからアンリへはわずかに9通のみが現存、これらは1800年から1815年に集中し、以後断絶してしまう。文通相手としてのポーリーヌの役割は、デル・リット氏も指摘するように数多く挙げられる。恋人として、妹として、母として、また自らの読書や思考を開陳し教育する生徒として、そして「理想の」紙上の対話者即ちもうひとりの自己 Alter ego として、などである。パリからの最初の5通の手紙においてピアノ、ダンス、読書、芝居、数学のことが、すでに成熟した文体で綴られる。そして、以後絶え間なく続くことになる妹への手紙執筆を初めとした様々な要求が散見できる。

2) ミラノ (イタリア) 駐屯期 (1800年5月～1801年12月)

ナポレオン軍における軍隊経験が、のちのスタンダール小説の視点の確かさに通じると言われるが、10代のこの時期の書簡にその兆候や旅行記的文体の片鱗を見て取れる。妹へは、軍務のかたわらオペラや観劇、読書に興じるいわば理想の好青年像を描出している。強い関心事であったアンジェラ・ビエトラグリュアへの恋については敢えて口を開かず。そして、ラ・セーニュ嬢のもとで進歩的で高度な教育を受け始めた妹を自己と二重写しにし、自分の読書や思想を全く同じように迫らせようとする。

3) パリ (1802年～1805年)

この時期は、軍隊をやめてパリで「文学修行時代」を送るいわばモラトリアム期である。アンリの膨大な量の読書、観劇、劇作の試みを妹への手紙に辿る。台詞朗読のレッスン場に出会った女優のルアゾンとの恋は、誇張され美化された「愛の物語」のテキストとしてポーリーヌに語られる。理想の女性像としてルアゾンとポーリーヌは一体化される。同時期のポーリーヌは、寄宿学校生活を終えて自宅へ戻りハードな教育を受け続けるが、兄の影響か、ロマン主義的「狂気」

の虜となっていることが読み取れる。

4) マルセーユ (1805年~1806年)

友人マントと共に、マルセーユの食料品貿易商で働き、また女優として同地に仕事を得たルアゾンと初めて結ばれて同棲同様の生活を始める。仕事においても恋愛においても極めて「現実的」な時期で、アンリはそれらに幻滅する。しかしボーリーヌへの手紙では、相変わらず夢見る情熱的なアンリ像を紡ぎ出す。トラシーや文学、歴史を語り、理想化された「ボーリーヌ」に理想化された「愛の物語」が語られる。そこには、将来銀行を設立して、ルアゾン、ボーリーヌ、友人のマントと4人で崇高なる理想の「共同体」を創ってパリで暮らそうという夢の物語も織り込まれる。テキストを介した、アンリ自身の不安定な精神と恋の正当化である。妹はこのような仮装テキスト上のアンリに倣って「物語」に融合されていくかのようである。

5) ブラウンシュヴァイク (ドイツ) 駐屯期 (1806年~1808年)

マルセーユで失業したアンリは、再び軍職に就く。先立つ故郷グルノーブルでの1ヵ月の生活については日記にも全く記述がなく、妹との現実の生活は謎として残る。パリから手紙というテキスト上の「生」、即ち理想的な関わり手「愛するボーリーヌ」ともうひとりの「自己」との対話は再開される。軍隊で次第に出世しつつブラウンシュヴァイクに駐屯するこの時期、北方ゲルマンの国への情熱や感激は殆どなくスタンダールへの芸術的影響も少ないと言われている。しかし、妹への手紙の中にはそれでも、「北方」の美化と、自負心にも支えられているであろう肯定的イメージ、ドイツ女性の美、ゲルマンの素朴な感性、詩、モーツアルト、ゴシック建築などへの賛美が誇張ぎみにではあるが語られていることがわかる。ボーリーヌの結婚問題に関しても、兄は自らの理想によってシナリオを描くが、故郷での現実とは無関係に進む。1808年の年明けに婚約、5月には結婚する。

6) 以後、ウイーン駐屯、パリでの官吏生活の野心と、ボーリーヌの結婚生活、イタリアでの休暇、そしてモスクワ遠征、パリ帰還、ミラノ行きを順に進んでいく予定である。1815年までのこの時期はアンリにとってはナポレオンと運命を共にした栄光と没落、ボーリーヌにとっては結婚生活の破綻、そして二人にとっては現実の接触の機会が重なるごとに関係が冷却化する時でもある。手紙というテキストと現実との乖離が大きくなればなるほど、手紙が文学テキスト的なものになることが確認できるだろう。1815年以降文通は断絶するが、1825年付の最後の2通の手紙における「何のためにパリに来たのだ? おまえは働くべきだ。」との兄の言葉の冷淡さは象徴的である。本発表では、さらにボーリーヌの生活をドワイヤンの論文なども援用して辿り直してみた。結婚後、そしてとりわけ夫の死後の親族による遺産相続問題で悲惨な境遇へと堕ちていったと言われる生涯である。しかし書簡に見られたように、ボーリーヌは兄アンリに多くの点で似ており、精神の根本には自由で意外に明るい要素を持ち続けていたとは考えられないだろうか。またデル・リット氏が提供しドワイヤンも言及している1835年と1840年の2枚のボーリーヌの肖像画デッサンから、「愚鈍になった」「病的な」との評価がなされているようだが、描き手の技量、あるいは年代の問題も含めて、考え直す余地がないだろうか。さらにドワイヤンが、ボーリーヌの結婚生活の不幸の最大原因としてしばしば言及する(ただしそれを一種の資質として肯定的にも捉えているが) 同性愛の性質も、兄の書簡中のいくつかの表現を根拠としているようだが、実際にことさらに言うほど重大なものだったのだろうか。これらの問題もさらに詳しく考察しつつ、今後の拙論を展開していきたい。

『リパのサンフランチェスコ教会』の手稿について

内田 善孝

ロマン・コロンのにより 1853 年『両世界評論』に発表されて以来、『リパのサンフランチェスコ教会』は二十回も版を重ねている。いろいろな校訂者がグルノーブル図書館に保存されている手稿を調べて、新しい版を出したと言うが、残念ながら完璧さに欠ける結果に終わっている。グルノーブル図書館に残っている手稿は一部分であり、そのうえこれら手稿は書き加え、修正などが多く、さらに原稿そのものが上下の部分が切り取られていたりしている。だから校訂者たちは自分に都合のよいところだけを手稿から選び、都合の悪い箇所、すなわち脈絡がつかない箇所は採用していない。手稿をもとに見直した版というと、いかにも科学的、客観的な体裁が整うが、大部分は 1923 年の H. Martineau の *Le Divan* 版に依拠した、中途半端な結果になっている。

『リパのサンフランチェスコ教会』の手稿を見ると、それぞれの手稿に数種類の番号がふってあるのに気付く。複数枚数の原稿を書く時、番号をふらないと整理ができない。これはあまりに当たり前なので、だれも番号の役割に注目してこなかった。一種類しか番号がふってなければ、これはたしかに自明の理で、分析に値しない。ただし数種類の番号がついていて、しかもそれが複雑に絡み合っていると、分析するのに十分値する。番号は推敲の順番を示しているで、手稿に残された番号を整理すると、スタンダールがどのように作品を創造していったか追跡することができる。番号が複雑であればあるほど、作品の推敲が困難をきわめ、作者が苦労したことを示す。

番号を整理してみると、グルノーブル図書館に保存されている手稿の順番は推敲の最終段階の順番であり、創作初期においては別のヴァージョンが存在したことが明らかとなる。上下が切り取られている原稿があることを述べたが、これらは最初のヴァージョンに属し、作品に大幅な変更が行われ、逸話から短編に成長したことの証拠である。筋の展開が修正され、これら初期のヴァージョンの原稿は不要な上下の部分が切り取られて、新しいヴァージョンの適当な箇所に挿入された。さらに詳しく番号の分析を続けると、何枚かの原稿は新しいヴァージョン用の差し替えの原稿であることに気付く。こうして推敲をたどってみると、『リパのサンフランチェスコ教会』は少なくも八回の書き直しが行われているのが分かる。

こうしてテキストの物理的な分析を経て、内容に目を転じると、初期のヴァージョンと最終ヴァージョンでの登場人物の性格の相違に気付く。推敲が進むに連れて、女主人公カンボパッサは *virtù* 溢れる女性に変身していく。そしてカンボパッサを補佐するフェラテラはイデオロギカルな人物に成長していく。また主人公セヌセの殺害をドンジュアンの結末と重複させるために、教会をドミニコ会からフランチェスコ会へ変更している。

手稿の『リパのサンフランチェスコ教会』の題名を調べてみると、*San Francesco à Ripa* となっている。教会の名前がイタリア語なのに、場所を示す前置詞 *à* だけがフランス語で書かれているのは異常である。この題名の筆跡をよく調べると、ロマン・コロンの字であるのが分かる。スタンダールが書き残した題名は *Santa Maria Romana* だった。ところがセヌセが逃げ込む教会の名前が *Santa Maria Romana* から *San Francesco a Ripa* に変更されたのを受けて、コロンの題名を筋に合うように修正した。

最後に、『リパのサンフランチェスコ教会』を『イタリア年代記』に入れるかどうかの問題が

長く論議されてきたが、これも手稿を調べれば解決できる。作品冒頭の「イタリア年代記作者からの翻訳」という文章が、『イタリア年代記』に入れる論拠だが、この文章は最初のヴァージョンでは存在しなかった。これは最後の推敲段階あたりで、スタンダールが書き加えたアリバイである。

教訓。二十回にもおよぶ版を重ねながら、だれも H. Martineau の権威を疑わなかった。手稿を調査したと自称する編集人達も、自分のくもっていない目で原稿を読む努力を怠った。Le Divan 版の影響から逃れることができなかった。権威は否定されるためにある。もう一度この言葉をかみしめよう。

第 20 回 (1997.12.26 於京大会館)

ボーマルシェの『罪ある母』とスタンダール

下川 茂

ボーマルシェの『フィガロの結婚』の『赤と黒』への影響については、すでに詳しい分析が松原雅典氏によってなされている。（『『赤と黒』の解剖学』朝日選書、1992 年）。したがって、『フィガロの結婚』の続編ともいうべき『罪ある母』と『赤と黒』との間に何らかの関連があることは、十分予想されることであった。

しかし、『罪ある母』のスタンダール作品への影響を追跡した研究は、管見によればまだ存在しない（御存じの方があればぜひ御教示下さい—下川）。『罪ある母』そのものが、もともと三部作の中で極めて評価が低く、論じられることの少ない作品であったことが、その一因と思われるが、*Beaumarchais ou la passion du drame*, PUF, 1994 によって、『罪ある母』の復権を行った Béatrice Didier 氏もスタンダールとの関連については一言も触れていない。

『赤と黒』のジュリアンとレナール夫人の恋は、松原氏が明らかにされているように、『フィガロの結婚』のシェリユバンと伯爵夫人の恋を下敷きにしている。しかし、『フィガロの結婚』では、シェリユバンは誰にでも恋をする若者で、彼と伯爵夫人との関係は、伯爵と伯爵夫人、フィガロとシェザンヌの二組のカップルに比べると、淡い関係に止まっており、二人は性的な関係にまで進むことはない。そのシェリユバンと伯爵夫人の間に実際に姦通事件があり、二人の間に子供まで誕生していたこと、またシェリユバンが自殺とも言える戦死を遂げていたことが明らかになるのが『罪ある母』である。『フィガロの結婚』では萌芽状態にしかないシェリユバンと伯爵夫人の恋を、ジュリアンとレナール夫人の方は実行するに至るのだから、『罪ある母』のシェリユバンも又、ジュリアン像の下敷きの一つになったのではないだろうか。例えば、『罪ある母』第 2 幕第 1 場で、伯爵夫人のシェリユバン宛の手紙の中で姦通の場面が回想されるが、「la surprise nocturne」、「Malheureux insensé」という言葉は、ジュリアンが初めてレナール夫人の部屋に忍んで行く場面で、夫人がジュリアンに「Malheureux」と叫ぶことを連想させる（ジュリアンは

予告しているから「不意打ち」ではないが）、又、第3幕第2場で、伯爵との間に生まれた長男の決闘による死を、伯爵夫人は森通の神罰と考え、神の復讐に背えるが、これは、スタニスラスの病気をやはり神罰と考えるレナール夫人を思わせる。さらに、第4幕第6場で、伯爵夫人は、「赤と黒のドレス」を身につけ、「同じ色の花束」を持って現れる。花束は第1幕第1場でシュザンヌが夫人に用意するように命じられたもので、実際に作るのは、伯爵の私生児であるフロレスティースだが、シュザンヌによれば、赤と黒は「血と喪の色」である。このドレスと花束は、『赤と黒』のタイトルの源泉の一つと考えられないだろうか。伯爵夫人とシェリュバンとの間に生まれた私生児レオンは、シェリュバンそっくりの容貌をしており、シェリュバンの生まれ変わりともみなすことができるが、フランス革命と啓蒙思想を支持し、義務に決して背いたことがないというレオンの特徴は（第4幕第13場）、ジュリアンにも共通する。

レオンが私生児であることを伯爵に隠している伯爵夫人にとって、シェリュバンとの森通は今も重くのしかかる秘密であり、この秘密の露見と告白が、『罪ある母』という作品の主な筋であるが、『罪ある母』にはもう一つの筋がある。伯爵夫人はレオンとフロレスティースとの恋を裏らせようとするが、フロレスティースを横取りしようとする悪漢ベジャルスが陰謀を企む。この副筋は『赤と黒』とは関連が薄い。しかし、義務感が強く、啓蒙思想を支持し、母親に助けられながら身近にいる若い娘と結婚することになるが、悪者のために邪魔される二十歳の青年が、スタンダールの別の小説の中にみつかると、『アルマンズ』のオクターヴがそれである。

『アルマンズ』も『罪ある母』も、貧しい縁戚の娘を息子嫁にと考える母の物語という一面を持っている。母が結婚前からその娘を自分の子供扱いし、したがって、二人の若者が兄妹のような関係に置かれる点も同じである。上掲 Didier 氏の書の『罪ある母』を論じた章のタイトルは、「喪、罪悪感、近親相姦 Le deuil, la culpabilité, l'inceste」だが、『アルマンズ』にも、「喪」と「罪悪感」と「近親相姦」の匂いは濃厚にたちこめている。『アルマンズ』では、最初から母親と息子の間の愛情の絆が極めて強いものとして描かれ、息子の不能はこの母子相姦的關係への「罪悪感」のためという解釈が可能である。オクターヴの死後、母とアルマンズは同じ修道院に入り、オクターヴの「喪」に服するが、『罪ある母』でも、幕開けで、伯爵夫人の修道院行が話題になる（第1幕第4場）。フロレスティースとレオンは、ベジャルスに騙されて、自分たちが血の繋がりのある兄妹だと信じ、兄妹相姦という近親相姦の禁忌に戦く。しかし、レオンはシェリュバンと瓜二つで、息子レオンへの伯爵夫人の愛情にはシェリュバンとの森通の思い出が投影されており、しかもシェリュバンにとって伯爵夫人は代母という母親的女性だった。『罪ある母』の結末は、勧善懲悪のハッピーエンドだが、その直前、秘密を暴露され、錯乱状態に陥り気絶した母を見たレオンは、母の死の責任は自分にある、母が死んだら自分も生きてはいないと叫ぶ（第4幕第15場）。従って、Didier 氏も指摘しているが、レオンと母の関係には、シェリュバンと伯爵夫人の母子相姦関係が重ねられており、『アルマンズ』の母・息子関係との類似はさらに強まる。『アルマンズ』には、母子相姦関係を象徴するものとして、母から息子に贈られるダイヤモンドが登場するが、『罪ある母』でも重要な小道具としてダイヤモンドが使われる。ダイヤモンドで飾られた夫人の腕輪には伯爵の肖像が描かれていたが、森通を疑う伯爵は、夫人をためすために、第1幕第8場で、腕輪をシェリュバンの肖像が描かれたものと取り替える。このシェリュバンの肖像を見て、夫人は錯乱に陥る。さらに、修道僧になることを考えていたオクターヴは啓蒙思想を知って、その計画を放棄するが、伯爵の命令でマルタ騎士団に入団して独身を守らされることになっていたレオンも、革命思想の影響で、独身の誓いを放棄する権利があると考えてい

る。(第1幕第12場)。

『アルマンズ』には『罪ある母』に良く似た細部がまだある。決闘で重傷を負ったオクターヴはアルマンズ宛の手紙を自分の血で書き、さらに読んだ後すぐに燃やそうにアルマンズに命じ、アルマンズは従う。戦場で傷ついたベジャルスも、伯爵夫人宛の最後の手紙を自分の血で書き、夫人は長い間保存していたこの手紙を、ベジャルスの企みで燃やさなければならなくなる。そのときの夫人の言葉は「(...) faut-il donc brûler tout ce qui me reste de lui ?」であり、アルマンズについての語り手の言葉は「(...) il fallait donc se séparer de tout ce qui resterait d'Octave」である。意味・語句の一致は、偶然によるものとは思えない。不釣り合いな結婚を拒む点も、アルマンズとフロレスティースは共通する。

その他にも、『アルマンズ』には『罪ある母』と共通する細部が幾つもあるが、作品の構成の面においても、『アルマンズ』は、町民劇 *drame bourgeois* である『罪ある母』に大きく影響されていると思える。町民劇と小説 *roman* の近縁性を、Didier 氏も上記の書の中で論じているが、舞台をパリとその周辺のサロンにはぼ固定し、家族と愛の問題を中心にテーマとし、悪漢の陰謀が筋の展開に重要な役割を果たす『アルマンズ』は、町民劇の世界を小説という器に移し入れたものとみることができる。町民劇と違う点は、同時代の生々しい歴史と社会のテーマが大きく導入されていることだが、十分に展開されているとは言い難い。『アルマンズ』では不十分な形でしか表現できなかった同時代の歴史・社会批判のテーマを、性愛のテーマと拮抗するところまで拡大し、単純な悪役に複雑な陰影を与え、さらに陰謀といった不自然な要素をできるだけ排除すると（『赤と黒』でもこの排除は完全ではないが）、『赤と黒』の世界になるのではないだろうか。スタンダール小説の起源と系譜については様々な説があるが、少なくとも『赤と黒』までは、町民劇の深化・拡大という視点から考えることも可能であろう。

1802-4 年の日記・文学日記の『罪ある母』に関する記述によれば、スタンダールは、『罪ある母』の道徳性を高く評価し、自作『二人の男』の手本の一つと考えていた。もっとも 1806 年 3 月 18 日の日記の観劇の感想では、『罪ある母』に手厳しい評価を下し、「会話」と「感情」の「誇張」と「虚栄」を攻撃している。従って、スタンダールが『罪ある母』を常に全面的に優れた作品として評価していたと言うことはできない。しかし、『罪ある母』の道徳性については、晩年の『ルニャールの道徳性について』でも評価を変えていないから（文中の記述から 1823 年 5 月頃の執筆か）、『罪ある母』の内容に彼が大きな関心をもち続けたことは確かである。たとえ「誇張」と「虚栄」に覆われた作品であっても、その「喪、罪悪感、近親相姦」という内容はスタンダールの心をとらえて離さなかったのではないだろうか。『アルマンズ』と『赤と黒』、とりわけ『アルマンズ』に見られる、『罪ある母』からの筋・語句・アイデアの引用・借用は、スタンダールの無意識にまで食い込んだその影響の大きさを示唆しているように思われる。

『リュシアン・ルーヴェン』——その政治的欲望のゆくえ

柏木 治

発表では、未決定状態におかれたリュシアンの退行的性質を指摘し、体制に批判的でありながらその体制から官職を得ているという自らの曖昧な政治的立場に対するスタンダール自身の意識がそこにどう関わっているかをみる予定であった。しかし、とりあえず今回は、リュシアンの退行性をあらわすものとして口唇的ファンタズムがあることを指摘し、小説自体はきわめて政治的でありながら、その主人公はどこまでもこの口唇性に満たされた雰囲気の中にとらえられ、いわば主体的に政治に参画することからはほど遠い状況にあることを示すにとどまった。以下、リュシアンの退行性についての議論の骨子を記す。

リュシアンは、まず小説の冒頭からどこにも属さない青年として、すなわち、放校され、職につかない宙ぶらりんの状態で登場する。かれは父の財政的庇護のもとに一見自由を享受する未決定の存在である。未決定とは、自分の情熱を選択的に向けるべき方向が存在しない、ということである。その意味でリュシアンは「欠如」によって満たされているといってもよい。エネルギーの欠如、存在の未決定状態としての主人公は、自分の欲望の赴くところをいまだもたないために、自らの意思でなにかを決定づけることはない。物語の中心である主人公において、物語を進展させる積極的な動機づけが欠如しているのである。したがって、この欠如を中心として、その周囲にそれを補完するかのように、意図する人物たち、欲望する人物たちが配されている。欲望はひたすら周囲で蠢いているだけであって、彼自身のそれとほとんど交叉することがない。べつの言い方をすれば、かれの欲望ははじめから去勢されたかたちで口唇的ファンタズムのなかに囚い込まれているとも言える。それは閉ざされた自室、母のサロン、鏡といったメタファーが物語るところでもある。

『アルマンス』においてもやはりこの口唇的ファンタズムは色濃くあらわれていたが、それはむしろオクターヴのという人物の性的特殊性に由来していた。性的に不能であるものが性器的ファンタズムから口唇性へと退行せざるをえないのは、いわば論理的必然である。ジャン・ベルマン＝ノエルはかつて、芝居半ばにしてジムナズ座から飛び出し、スープを飲むオクターヴにこの口唇性を読みとったのであった（オクターヴは、劇中の夫婦交感を暗示する場面で劇場を抜け出し、この食物摂取（スープという液体は「母乳」の置き換えである）によって口唇的性欲を満たす）。オクターヴ同様、リュシアンにも口唇性は色濃く反映している。スタンダールの人物たちに愛煙家はほとんどいないのだが、このリュシアンだけはべつだ。物語の発端からかれは葉巻とともにあらわれる。おそらく葉巻は、理工科学校の学生、さらには大ブルジョワの子息という社会的意味を含んでいるのだろうが、この小説にあって「葉巻をふかす」という行為は、たんに付随的效果として考えるだけではすまされないほど繰り返される。まず冒頭で父が息子をからかう場面（「不幸にしておまえに先立たれたら、パール＝ラシェーズの大理石の墓石に、どのような碑銘が刻まれると思う？ <旅人よ、足をとめよ！(Siste, viator!) 共和主義者リュシアン・ルーヴェンここに眠る。故人は二年間、葉巻と新調長靴に対して執拗なる戦いをつづけたらさ」）はもとより、少尉リュシアンの政治に関する自問自答は、口唇性への退行の症候があふれんばかりの露

固気のなかで行われるのが常である（「リュシアンは、バルセロナから届いた甘草紙で巻きたての葉巻に楽しげに火をつけながらつぶやいた（…）」「ふかい嫌悪をうかべたかれの唇から、小さな葉巻が豪奢な絨毯の上におちた。これは母の贈物だった。かれはあわてて葉巻を拾いあげると、もう別人になって、戦争嫌悪の情は消えていた。」「（…）」とかれは葉巻にふたたび火をつけながら、哲学的に考えつづける。）。このように、母親が「息子が風邪をひいた日に、自分の寝室からはがして息子の部屋に敷かせた」「豪奢なトルコ絨毯」が敷きつめられた自室で、かれは葉巻を何度もふかしながら問答を繰り返している。まるで母からの贈物に身をつつみ、口唇的ファンタズムのなかで遠い外部として政治を見やっているかのようだ。

このような状況に置かれた青年の女性観、あるいはかれが行う恋愛は、当然のことながら通常のかたちをとらない。リュシアンの恋嫌い、女嫌いの性格を思わせるいくつかの箇所は措くとしても、第一部のもっとも中核をなすシャストレール夫人との関係自体が二十歳の青年の通常のそれとはおおきく異なっている。いささか直接的な言い方をすれば、この恋愛は性器的な欲動に支えられた発展の過程を進まず、強固な父権と母性によっていつまでも子供状態に留め置かれた青年に特徴的ともいえる退行状態に終始する。そして、この退行的口唇性は、リュシアンと夫人のあいだに交わされるあの不可思議なミメティスムへと連なっていく。

リュシアンは夜、ラ・ボンブ街にいて夫人の意の下で葉巻を存分に吸う。これは幸福の時である。奇妙なことに、夫人のほうもリュシアンのそれを真似て甘草紙のまるめたものを唇にくわえて幸福にひたる。この場面はむしろ性器受的解釈を施してしまいそうな箇所であるが、ここでの両者の関係は、口唇的ファンタズムの無上の快楽にひたっていると考えるべきであろう。夫人はもはやレジティミストの最右翼としてのシャストレール夫人ではなく、パチルドとして姿をあらわしていることに注意したい。パチルドとは若くして死んだクレマンチヌの娘の名であることは、スタンダールの読者ならだれでも知っている。さらにそれを証すかのように「こんな稚戯に等しい行為 *enfantillage* に夫人という名前はまじめすぎる」と、作者自身ことわっている。この *enfantillage* という言葉がパチルドという名を呼び起こしたことはいうまでもない。ここには「子供」を想起させる言葉使いと文字どおりの口唇的雰囲気のみちあふれているのだ。いずれにしても、直接的接触のない、それでいて聴覚と、それによって喚起される触覚の快感に身を委ね、両者は同じひとつの口唇的ミメティスムのなかで交歓するのであって、両者の恋愛が口唇的欲望に支えられていることを物語るひとつの *symptomatique* な場面として読むことができるのである。

さらにこのことをよりいっそう雄弁に物語るのが、デュ・ボワリエ医師の陰謀であろう。「子供」のようなリュシアンがこの陰謀によってシャストレール夫人の架空の「出産」に立ち会わされ、偽物ではあるが実際の赤ん坊をみせられて、かれの口唇的恋愛は一挙に崩れ去る。まさに性器的欲動の結実というべき現実の「子供」の存在、これは口唇受的ファンタズムのなかに生きていたリュシアンにとってみればまさに「とつぜん恐ろしい真実 (*l'affreuse vérité*) が顔をのぞかせた」に等しく、かれはそのままナンシーから逃走するほかなくなるのである。森通し、悪人に子供を生ませるジュリアン、あるいは人妻に子供を生ませるファブリスとは根本的にちがって、口唇的愛情のなかにしか生きられないリュシアンにとって「子供」は無縁である。あえていうなら自分こそが象徴的「子供」の座に位置すべき存在なのであって、その地位をおびやかす現実の「子供」はあってはならない存在である。

このように、リュシアンに見られる口唇受的特徴は、かれの未決定状態に係留された精神状態

の症候的特徴として考えることができるわけだが、この未決定状態は、かれの政治性を根本から支配することになるはずである。

第 21 回 (1998.03.29 於京大会館)

『恋愛論』Fragments divers 草稿調査報告

柏谷 祐己

『恋愛論』諸断章 Fragments divers の部分は、議論の都合上いくつかの断章がバラバラに引用されるのみであり、その総体としては現段階においてほとんど研究家の関心の外にあると言わざるをえない。とくにこの部分がある統一された思想を持っているとか、断章の配列にある種の秩序があるなどとはみなされていないようである。『恋愛論』自体の理論的価値の軽視がその大きな原因のひとつであるのは疑いない。コロンの「ペイルは常にこの本を自分の主著とみなしていた」という Appendice inédit (現在は所在不明) における発言も、かえってこの著作にメルルドの思い出としての価値のみを見る態度を導き出してしまった一因なのである。

筆者は Fragments divers 部分の理論的重要性を主張しその価値をあきらかにしたい。その試みの準備段階として草稿を調査し、既存の批評版や研究書の異同を正してみた。グルノーブル市立図書館に残る『恋愛論』草稿が、出版にまでいたったスタンダール著作の決定稿以前の状態が一部とはいえ現存している貴重な例であるのに注目されることが少ないのは残念である。

細かい諸事実は割愛せざるをえないので、ここでは執筆時期に関することだけ述べておきたい。そのことが Fragments divers 部分の配列の論理的秩序の有無ということに関わってくるからである。

残されている Fragments divers 草稿には 1820 年 10 月の日付が数カ所みられる。"Copiate serrato. 15 7bre" というコピストへの指示の日付をどう解釈するかは困難が残るが、それでも現存草稿は同年 9 月 25 日にスタンダールがミラノから送り出した『恋愛論』原稿には含まれていなかったものと考えられない。周知の通り、セヴェロリ伯なる人物に託されて発送された原稿はいったん行方不明になり、1821 年にみつかってから出版までにまた著者の修正が加えられるのだが、それよりずっと前、原稿発送直後の 10 月、そしておそらくは発送直前の 9 月中からすでにスタンダールは、9 月 25 日の発送原稿には含まれなかった新しい断章を書き連ね始めていたのである。

デル・リット先生ご夫妻のこと

鈴木 昭一郎

Del Litto 先生に初めてお目にかかったのは 1969 年の夏、東大の故小林正先生ご夫妻のお供をして Grenoble に行き、rue Voltaire のお宅へお伺いした時であった。師事したのは 70-71 年、そのころお宅は Isère の対岸、Bastille への急坂の途中、3. rue Maurice-Ginoux (通称 Montée Rabot)、Musée Dauphinois の前の小径を入った突きあたりの山荘であった。この家は、1971 年 5 月 11 日、電気工事の配管工が壁裏裏に点火したままのトーチランプを放置したために半焼し、数千冊の蔵書が焼尽した。私はそれから 10 日間、一人で焼け跡の片付けをお手伝いした。

先生は、1984 年 11 月、フランス政府派遣文化使節として来日された。発議者であるフランス大使館文化部の Jean Demange 氏が知人であったため、私は先生の来日に関する travail de correspondance を引きうけることになった。

85 年 8 月、先生はご自分の運転で Pauline の嫁ぎ先の Tuellin の館、Berthet 事件の Brangués の村、Grenoble を見下ろす St-Nizier-du-Moucherotte の展望台にご案内下さった。

87 年 8 月 15 日、私は先生とともに Lydia-Elisabeth 夫人を、静養先の Allevard に訪ねた。Grenoble から東北東 40km の保養地、昔の小さな炭鉱の跡と館があり、Ecole Centrale で Henri Beyle の同窓、*Vie de Henry Brulard* では Tencin と呼ばれる Louis-Joseph-François Barral の父祖の地である。私はここで、以前からお話はあったのだが、夫人の切手とマルク・ポスタルの膨大なコレクションを頂くことになった。夫人の記憶によれば、あの火事のときに私が炎から救い出したものであった。「あなたはあのとき私を救ってくれた。もう一度救ってくれ」と言われるのは、このコレクションが商人の手に入り、散逸することを最も恐れておられたからである。ご夫妻にはお子様がない。切手はともかくマルク・ポスタルの方は私を躊躇させた。切手が実用に供せられる以前、手紙には封筒を用いず、手紙を裏返しに折りたたみ左右の端を相互に差しこんで封緘で閉じ、反対面に宛名を記した。それを宿駅に持参し、料金を払い、宿駅の長が宛名の面にマークを入れた、それがマルク・ポスタルであり、もちろんマークを切り取るのではなく、手紙全体が蒐集の対象になる。1 通が 87 年の時価で 700 という高価なもので、それが Ardèche 県の Tournon に住んだ Botu (ou Bottu) 家あてのものを中心に約 2500 通あるというお話であった。しかも市場価値は別として、これらすべて肉筆の手紙の内容は、歴史・経済・政治・社会・文化など多くの点から、それぞれひとつしかない貴重な資料で、すくなくとも私が死蔵すべきものではなかった。私はこのコレクションを京都大学に収めることを提案し、Del Litto 先生の起草で夫人と私とのあいだに契約書がかわされた。日本にもちかえり、その 1 通 1 通を同定し、番号をつけ、コンピューター入力用データを印刷した特注のシートに収め、50 通ずつ綴り引きの書類箱 43 箱に収納するまでに 10 年かかった。

87 年以降も、私はなんだか rue Lesdiguières のお宅で Del Litto 夫人にお目にかかった。92 年 3 月のスタンダール没後 150 年記念クロックのとき、私は Grenoble へ行く時間がなかった。翌日の Montmartre の墓地は雨であった。

94 年 9 月 21 日、私は Grenoble で Del Litto 先生にお目にかかった。夫人は療養中でご不在で

あった。先生は私と二人で写真を撮りたいといわれた。「Bâtisseur になれ。Démolisseur になるな。私の弟子なら決してギブアップするな」 私はまだ *Les Deux Hommes* の解析に取りかかることができずにいた。

96 年 5 月、Del Litto 夫人は物故された。私のマルク・ポスタルの仕事はまだ終わっていなかった。同じころ先生は un petit accident cérébral のため、お身体が不自由になられた、と書いてこられた。

98 年 3 月 10 日、私は先生のおかげで世にでた *Stendhal et le théâtre* を手づから献呈するため Grenoble のご自宅のベルを押した。ドアをあけたのは先生ご自身で、左手に杖をついて立ておられた。先生はまず、1811 年、当時 28 歳の Stendhal がミラノからパリへの帰途 Tuellin に滞在し、その間当時 83 歳になっていた祖父 Henri Gagnon を Grenoble に訪れ、それが二人の最後の出会いになったことを話題にされた。次の話題は Grenoble における Stendhal の présence の衰退であった。Stendhal の生家にあった Musée de la Résistance et de la Déportation は移転し、生家は閉鎖され、「見学希望者は La Maison Stendhal, l'appartement d'Henri Gagnon へ」という貼紙がでているが、その Maison Stendhal も週に 3 日しか開いていない。Musée Stendhal, ancien Hôtel de Lesdiguières も、児童福祉施設になって跡形もない。「この世に gratitude というものはないのだろうか」と、先生は私に問いかけられた。それは少なくとも先生ご夫妻と私の間には存在するものであった。

Correspondance générale 第 4 巻の校正刷が机上におかれていた。別室の壁の小さな写真は Lydia-Elisabeth Del Litto 夫人の墓碑であった。墓は一年の三分の二は雪に埋もれる山のなかに作ったという話は以前伺った。大理石の塊の向かって右半分は tailler され、写真では判読できない夫人の名が刻まれている。左半分は原石のままで、十字架が彫られている。この比翼塚は、Gresse-en-Vercors, Vercors 山塊の僻地にある。

先生は一人で暮らし一人で仕事を続けておられる。しかし故 Lydia-Elisabeth 夫人は、つねに先生とともにある。彼女は先生の秀でた助手であると同時に、すぐれた資料発掘家であった。昨 1997 年 11 月 5 日、パリ市長 Jean TIBERI 氏主催、アカデミー・フランセーズ会員、ビブリオテーク・ナショナル館長 Jean-Pierre ANGREMY 氏列席のもとに、Bibliothèque Historique de la Ville de Paris (Hôtel d'Angoulême Lamoignon) で、Correspondance générale 第 1 巻の出版記念レセプションが開かれた。師に対して不孝なことに私は出席できなかったが、同日付で出版された *STENDHAL FOR EVER / Rive droite-Rive gauche / Lettres inédites / d'André Billy à Adolphe Paupe / Réédition de "Séance nocturne au Stendhal Club" / par V. Del Litto / Avant-Propos: Victor Del Litto / par Pierre-Jean Rémy / de l'Académie Française / Bibliothèque Historique de la Ville de Paris* という小冊子がある。先生はこの冊子を私にあたえ、扉に私のために次のように書かれた: A Shoichiro Suzuki / Stendhalien et ami / en souvenir du passé et de ma femme / toujours présente / Grenoble, le 10 mars 1998.

Michael Nerlich 著 *Apollon et Dionysos ou la science incertaine des signes* (Marburg, Hitzeroth, 1989)について

下川 茂

ミシュレは、『フランス革命史』第14巻第1章で「クローツは、すべてのドイツ人同様、汎神論と自然と無限の国の奥深くからやってきた」と述べている。ネルリッヒ氏は、現代に蘇ったアナカルシス・クローツではないだろうか。

ギリシャ神話の神々と『パルムの僧院』の登場人物を対応させる氏の試みの一つ一つを、ここで検討することはしない。なぜなら、氏は、それら個々の対応関係の事実よりも、そこから明らかになる作品の構造をこそ自分は問題にしている、と明言しているからだ。この点は、このところもっぱら源泉追求的研究に携わっている評者にとって他人事ではない。確かに、源泉研究は、作品の構造・内容にまで踏みこまなければ、研究者のマニアックな文献漁りに終わる危険性があるから、氏の自負は大いによしとしなければならない。そこで問題は、氏が、その大部の研究の結果見いだした作品の構造・解釈ということになる。

氏によれば、スタンダールは、『パルムの僧院』において、ド・メーストルやド・ボナルドらの「王政復古のイデオロギーによって」「感覚論・唯物論」が「断罪されていたときに」、「ファブリス・エロスを主人公とする、完全に異教的な、身体・性の祭典を言祝いだ」(200頁)（『パルムの僧院』の執筆時期が七月王政下であることを、氏は一貫して無視しており、これは大きな問題だが、ここでは論じない）。そして、フランス革命・ナポレオンを支持・崇拝するファブリスは、フランス革命・ナポレオンの敗北を意味するワーテルローで、「革命時代の終わりは一時的なものでしかないこと」を示すために「エレウシウスの秘儀」を体験する（同）。フランス革命と古代ギリシャ・ローマの政治思想と神話の関係については、「L'initiation du jeune républicain selon Eleusis ou les quatre chevaux de l'Apocalypse. La Chartreuse de Parme et Jean-Charles Dupuis, citoyen français」(*Recherches et Travaux*, no 46, «Stendhal, la politique et l'Histoire», Université Stendhal, 1994)で、氏はさらに詳しく述べている（ちなみに、『アポロンとディオニソス』以後の氏のスタンダールに関する論文は、多くは、この主著に対する評価への執拗なまでの反論と補足である。）それによれば、フランス革命は、異教古代の思想を、その神話まで含めて、旧体制に対する武器として採用した。そして、『パルムの僧院』は、反動的な時代に対する「スタンダールのジャコバン的挑戦」(198頁)ということになる。

フランス革命がギリシャの共和制に、またナポレオン帝政がローマの帝政に、政治思想的に大きな影響を受けていることは言うまでもない。しかし、古代の神話や宗教までフランス革命が全面的に取り入れたと主張するのは、行き過ぎではないだろうか。ネルリッヒ氏は、Dupuis 著 *Abbrégé de l'origine de tous les cultes* をスタンダールの種本として、上記「L'initiation (...)」の中で大きく取り上げ、Dupuis が「エレウシウスの秘儀」を高く評価したとし、引用身しているが、評者が原本を読んだ印象は十分違う。Dupuis は、確かに、目下の敵であるキリスト教と比べて異教を上に出しているが、異教が手段とした幻想・威信・秘密性を宗教一般の持つ大きな欠点と考えており、「エレウシウスの秘儀」も例外ではない。Dupuis の書の主張は、キリスト教も含めてあらゆる宗教の起源を「哲学」と「博学」によって明らかにすることであり、たとえそれが異教古代のものであっても、過去の時代の何らかの宗教を採用しようというようなものではない。ネルリッ

ヒ氏は、Dupuis が「迷信を、迷信の武器そのもので打ち倒す」ことを勧めているとしているが（*« L'initiation (...) »* p. 128）、そんなことは一言も言っていない。氏も引用しているが、彼は、「エレウシウスの秘儀、そして一般にあらゆる秘儀は」（ネルリッヒ氏は、「エレウシウスの秘儀」を目立たせるために、「そして一般にあらゆる秘儀は」という引用後半の部分を省略している）、その「幻想と威信」という「手段は良くない」が、「人類を改善し、習俗を改良し、法よりも強力な絆で人間を抑制する」という「目的」は「称賛されるべきものであることを否定しはしない」と控えめに言っているに過ぎない。

フランス革命における古代異教神話の役割の過大評価をドイツ的と呼んではいけないだろうか。氏は、革命のギリシャ復興の系譜として、「アンドレ・シェニエ」「ヘーゲル/シェリング」「ヘルダーリン」という名前を挙げている（193頁）。また、ニーチェとの関連も、「*Sur la partition de La Chartreuse de Parme, ou l'épisode de la Fausta F*** n'est pas détachable*」（*Stendhal « La Chartreuse de Parme » ou la « chimère absente »*, SEDES, 1996）で指摘している（98頁）。氏の系譜の中にフランス人がシェニエ一人だけなのは示唆的である。フランス革命が実現する筈だったものが、人類の黄金時代ギリシャ文明の丸ごとの復興であるというのは、特殊ドイツ的な近代化の後進国ドイツの知識人がフランス革命を仰ぎ見て描いた幻想にすぎないのではないだろうか。革命フランスには、Dupuis のような反宗教的、唯物論的哲学者たちがいたから、「理性の祭典」や「最高存在の祭典」を、純異教的な祭典にするわけにはいかなかった。革命の「非キリスト教化」は革命の異教化を必ずしも意味しない。ネルリッヒ氏は、自分の読解はすべてテキストの「表層」をもとにしている、作者の心理や無意識や自伝的事実、さらには歴史や集合的無意識等々といったテキスト外のものに、自分は頼ったりしない、とことあることに主張しているが、彼の「表層」解釈そのものが、ドイツ的なフランス革命解釈の土壌に根差していることには無自覚である。それだけではない。ワーテルローの場面の氏の読解に明らかだが、若年時の夢から覚めねばならなかった先人たちと違って、氏は今なおフランス革命の熱心な支持者であるらしい。『バルムの僧院』が、20世紀末のアナカルシス・クローツたる氏の目に、反動的な時代に対する抵抗の書ともっぱら映るのは当然である。

『バルムの僧院』の異教的性格も、作者スタンダールの革命とナポレオン支持も、確かに事実には違いないが、いずれも部分的な事実すぎない。それを、氏のように、「一貫性 *cohérence*」の名のもとに、唯一有効な解釈として主張するのは、一面的の謗りを免れない。たとえ、他に「一貫性」のある解釈が提出されていない限りと限定してもである。作者の心理や無意識を解釈の手段とする方法を、氏は有効な解釈からもともと排除しているから、自分の解釈だけに「一貫性」があるという言明自体にも問題がある。しかし、「疑い無く」や「完全に」を連発する氏の自負は大きく、自説を承認するかどうか、要所要所で必ずや脅迫的に読者に迫らずにはいられない。これも又、「ドイツ国民の最も特徴的な性格である」「熱意」（スタール夫人『ドイツ論』）の現れかもしれない。

しかし、源泉研究としてみれば、氏の研究が非常に内容豊富で刺激的なものであることは間違いない。古代の神話だけでなく、これまであまり注目されてなかった近代の様々な作品との関連も取り上げられており、特にゲーテらドイツの作家については、さすがに堂に入ったもので、大いに啓蒙された。だからこそ、そこから引き出された氏の結論のあまりの単純さに、評者は批判的にならずにいらなかった。

Stendhal et la Hollande. Correspondance administrative inédite 1810-1812. Etablissement du texte, introduction et notes par Eliane Williamson, préface de V. Del Litto. Londres, Institute of Romance Studies, 1996.

岩本 和子

「まるでおとぎ話のようだ。」とデル・リット氏は序文を寄せている。多くの研究者にとって作家の直筆草稿発見は一種の夢であろう。文学的テキストではないとはいえ、これだけ大量の文書が「発見」され、作家の人生の一時期に新たな光を当ててくれたのである。

「スタンダールとオランダ」はオランダに関する作家の相対文化論を跡づけるものではない。副題が示すように、1810年から12年にアンリ・ペールが作成あるいは受領した公文書資料集である。編者ウィリアムソンは「ある直感から」国立古文書館で皇室に関わる資料段ボール箱<fonds O2>の閲覧を要求し、その中にアンリの筆跡になる、あるいは明らかにアンリも関わったと思われる文書を見出したのである。彼女は膨大な時間と労力をつぎ込んでこれらを分類、整理、そして詳細な注釈と解説文を添えて出版し、我々の利用しうるところとしてくれた。

アンリ・ペールは1806年以来、ナポレオン軍の経理将校であったピエール・ダリュの部下としてドイツやオーストリア戦役に従軍していた。そして1810年初頭パリ帰還後は、画策の末、8月1日付で悲願であった参事院書記官に、8月2日には帝室財務監査官に任命され、帝政下の官吏としてとりあえず出世コースに乗ることになる。謎であったのはこの時の仕事内容と仕事ぶりである。日記・私信の類には、仕事のせいで時間がないと確かに嘆きつつも恋や芸術のことが相変わらず語られるので、軍人としての自覚も仕事能力もさしてない「ディレクタント」「ダンディ」のイメージが固定化されてしまった。のちになっても、いわば社会的栄光の絶頂期にあったはずのこの時期の自己についてなぜかスタンダール自身沈黙を守っているのである。

ミシェル・クルーゼ (*Stendhal ou Monsieur Moi-même*)が当時の業務内容を例外的な詳細さで記述しているのは、ウィリアムソンによる調査の進行を踏まえてのことであろう。これによればアンリは、ヴェルサイユ、バガテル、フォンテヌブロー、ムードン、サン＝クルーの諸宮廷に関する事務に携わり、さらに1810年10月からはナポレオンの決定による大規模な仕事、即ちルーブル美術館の皇帝財産所蔵品すべての正確な分類と目録作成の担当となったのであった。オランダ王室財産についても、ピエール・ダリュはまず自分の親族であるアンリにその管理いっさいを任せようとしたが、皇帝はその任にオランダ人を希望する。そこでアンリは、オランダとの間での重要文書作成、予算監督、上司ダリュから皇帝に提出される報告書や諸条項の作成などといったきわめて責任ある仕事に従事することになったのである。

ウィリアムソンによる資料集は、従ってすべてが厳密に形式的な公文書である。その第1部「スタンダールの手紙及び報告書」は、ダリュの検閲を経て皇帝あるいはオランダの要人たちに送られるべき「オランダ部局」の文書で、筆跡はアンリだけでなく他の書記官のものも（おそらくその草案にアンリも関わったという意味で）収録される。署名は多くが「ダリュ」である。第2部は部局宛の書簡あるいは通知状と、アンリによる書き込み、予算一覧表、皇室費に関する政令などからなる。ともかく、納税状況から動物園に入れる動物に至るまであらゆる事項がやりとりされていたのである。1810年10月から1812年初頭にかけてのスタンダールの「公的エクリチュール」とでも言えるものが、すべてここにはある。貪欲とも言える徹底さで、極めて詳細な

註とともに呈示されているのである。ただし、ウィリアムソンによればこれらは同時期のダリュエのもとでの仕事の一部ではない。オランダ以外の王室領、宮廷、家具、博物館、召使などに関するさらに膨大な文書を、第2巻として準備中だという。

この禁欲的、実務的、かつ無機質的でさえある文書をひたすら追うことで、何が見えてくるのだろうか。

第1にそれは、歴史との関わりであろう。明らかに意図的に、ウィリアムソンは「1795～1815年のオランダ」の歴史概略を補足記述している。ナポレオン戦争に続き、1806年6月5日ルイ・ボナパルトがオランダ王に任命され、その後フランス帝国によるオランダ併合、支配に至るヨーロッパ史の一ページである。その時の行政の現実が、役所の一室で書記官たちによって書類上に記されていく。それは刻一刻と動き続ける歴史の証人でもあり、また経理局長の署名と共にそれら一枚一枚の書類が歴史を動かしている、まさにその現場に我々は居合わせることになるのである。その書記官たちの中でも特にダリュエ氏に重用されていたのが、文学的テキストを通して我々が親しんできた作家であったことに目眩さえ覚えるのは筆者だけであろうか。

第2に見えてくるものは、やはりスタンダールの伝記的事実の新たな一面であろう。本書で明らかになったアンリの仕事ぶりは、親戚という「コネ」で得た職の上司ダリュエからは絶えず叱責され、決して実務に有能な青年であったとは考えられなかった、そのイメージを大きく転換させるものであろう。ダリュエのもとでの過酷な役所仕事を彼は次々とこなす。有名な「縦り字の間違い」も当時は極めて普通のことであった、とウィリアムソンは注釈する。ダリュエを心底恐れていたとすれば、それはまた尊敬と屈服の感情でもあり、この感情の対象を満足させるためには努力を惜しまなかったのである。ダリュエをさらに背後から支配するナポレオンもまた、畏れの対象に他ならなかったと言えよう。

第3は、文学テキストとの関わりである。これらの文書作成の仕事がのちのスタンダールの文体形成にとって重要な位置を占めることを、ウィリアムソン自身強調している。確かに、厳密な資料をかき集めてそれらを誇張のない客観的な文体で「モザイク状に」組み立てる技術は、小説における<faits divers>の尊重と構成方法、文体にも通じるだろう。また「エゴチスト」スタンダールがすでに顔を出していることも彼女は指摘する。即ち、公文書への書き込みに<moi>が頻出するのである。例えば「私 moi が確認した表」「私 moi (だけ) のための注」などといったものである。要するに、書記官アンリの公文書は、スタンダールの文学的エクリチュールのいわば<avant-texte>であるというのだ。おそらく適行的に評価すれば、当時の公文書も潜在的な「文学テキスト」と言えなくはないだろう。

しかし問題は、どこまでをスタンダール＝アンリ自身のエクリチュールと考えるのかということである。前述のように署名の多くは「ダリュエ」であった。また他人の筆跡によるものも多数ある。たとえアンリ自身の手になったとしても、それらは形式と、そして行政の、皇帝の、直接的にはダリュエの意図に沿ったいわば強制されたエクリチュールでもあるのだ。本書の資料を実務の道具以上の意味を担ったテキストとして見ようとするならば、そこで問題にすべきは、「前テキスト性」だけでなくエクリチュールの主体の問題や「間テキスト性」などでもあるだろう。

公文書もスタンダールのテキストと見做す考え方は、新たに刊行中の Correspondance Générale において明確に認められているようである。編者デル・リット氏が、日記や手紙もすべて一種の「自伝」的テキストと考えているとすれば、そこにはさらに公文書も加えられることになるのである。いずれにしても、いまだ未開拓といってもいいスタンダールの書簡研究に、ウ

イリアムゾンが、デル・リットと共に貴重な資料を豊富に提供してくれたことは間違いないだろう。

書評

Stendhal/La Chartreuse de Parme. Textes réunis par Pierre-Louis Rey. Klincksieck, 1996.

Stendhal, « La Chartreuse de Parme » ou la « chimère absente ». Textes réunis par José-Luis Diaz. SEDES, 1996.

井出 勉

——『パルムの僧院』論を巡って——

«agrégation»のおかぢとはいえ、『僧院』研究に目が向けられ、そのコロックの成果としての後者の論文集は刺激的なものであった。今回の書評では、枚数上直接言及できないが、これまでのアンソロジーとしての論文集である前者のテーマ（例えば M. Crouzet のもの）が、現在も議論の対象となることを、そして、この二つの論文集に『僧院』論の過去と未来をつなぐ架け橋のような潜在的なテーマの存在の可能性を探ってみたい。両者には、Ph. Berthier, G rald Rannaud, Pierre-Louis Rey, Serges Serodes, Michael Nerlich, Jean-Jacques Hamm の六人の執筆者が共通している。

後者のコロックの論文集は、「Rougestes」（『赤』派）か「Chartreux」（『僧院』派）かという問いを我々に改めて考えさせる Berthier の論文を巻頭に置いている。当然「Chartreux」の方が、より一層、『僧院』のもつ「musicalit 」に敏感であると言っていいだろう。Rannaud も「dict e stendhalienne」（スタンダールの口述筆記）のもつ音楽的エクリチュールの源として、『僧院』第1章 Milan en 1796 は、『ナポレオンの生涯にかんする覚書』の第7章からほぼしり出た、幸福が中心テーマである「introduction musicale」（音楽的導入部）であるとしている。Didier の論文もそのタイトルが示すように、やはりスタンダールの「improvisation」のもつ音楽性を、繰り返される二つの鍵となるエピソード（ワートルローのエピソードとファルネーゼ塔（牢獄）のエピソード）を通して考察している。語の音楽的意味をもった、多様な繰り返しについての指摘、特に「rappel d'un rappel,  cho d'un  cho」という表現は『僧院』のもつ音楽的エクリチュールの本質をついているように思われる。

Pierre-Louis Rey は、ファブリスを「fuyard」（逃亡者）として位置づけ、「se sauver」（逃げる／救いを得る）という語のもつ曖昧さに着目し、繰り返される逃亡は、冒険小説の主人公の宿命であるという。それゆえ『僧院』が、西部劇やヒッチコックの映画を想起させるという指摘も頷ける。この論文でも、繰り返し・逃亡（フーガ）は『僧院』の「musicalit 」と絡み合う。Genevi ve Mouillaud-Fraisse が扱っている複数の国境の問題も、ファブリスが危険をくぐり抜ける度に読者の目に魅力的な人物に映っていくという点で、前述の Rey のように『僧院』を冒険小説、大衆小説に近づけている要因の一つであろう。たとえ Rannaud が言うように元になるテキストが存在したとしても、テキストの「oralit 」（口語性）は、その「musicalit 」とは切り離せない。Nerlich が『僧院』を「fugue musicale」（音楽的な道走曲）と定義しているのも、その証左である。音は特に、ワートルローの場面で重要な役割を果たす。それは、Margherita Leoni が指摘しているよ

うに、戦争では聴覚が鋭くなるからである。残念ながら脚注にとどまっているが、Yves Ansel は、『僧院』のメロドラマ的人物（特に副次的人物や端役）は典型的で、J. グラックがデュマ的と評する『僧院』の大衆小説的な要素についての指摘は、決して『僧院』を貶めるのではなく、肯定的にスタンダールの小説を「小間使い向け」小説として読む可能性を示している。この二つの論文集から、『僧院』の潜在的なメロドラマ的・大衆小説的要素を、文字通り « mélo-drame » のもつ « musicalité » を、再評価する必要性を感じ取ったのは私一人であろうか。

書評

Nicolas Boussard, *Stendhal, Campagne de Russie 1812. Le Blanc, le Gris et le Rouge*, Édition Kimé, 1997, 150 p.

粕谷 祐己

スタンダールとロシアというテーマに関しては 1995 年に *Campagnes en Russie. Sur les traces de Henri Beyle dit Stendhal* (sous la direction de Nicole de Pontcharra, Solibel France) という論文集が仏露友好の意味をこめ UNESCO の支援を受けて出版されているが、これより対象をずっと 1812 年のロシア戦役にしぼった著作が昨年刊行された。著者はトゥール大学で哲学担当の教官を勤め、現在はスタンダールの政治哲学を研究中である由。

恋愛、栄光、野心を近代の三情熱と呼ぶ著者は、スタンダール研究において前の二つに比べて軽視されてきた三番目の情熱、野心をテーマに据えている。

いうまでもなく 1812 年の戦役前は、スタンダールが世間的な意味で栄達の頂点に達した時期であり、文学的栄光を軽視はしないものの出世に対する意欲も満々のように見える。しかしペリスムは本質的に個人主義的なものであり、困難が増すにつれて野心の空しさを彼は感じるようになる。火に包まれるモスクワに彼は「歴史の崇高」を感じ、周囲の人にわずらわされずにこの感覚を味わいたく思う。Une pyramide de feu という表現にはある種宗教的な感情の現われさえ見ることができる。Plaisir moral の全くなかったこの遠征のあと彼はもはや自分を以前と同じ人間とは感じられなくなっていた。帰還直後は芸術にも音楽にも、女性に対する興味さえ枯れ果てていたほどであったというし、もちろん肝心の政治的野心も満たされることがなかったのである。

構成としては、主にスタンダール自身紹介記事を書いている Comte de Ségur の著 *Histoire de Napoléon et de la Grande Armée* (1825) などが記述する状況を背景に、日記や妹ポーリーヌ、アレクサンドリーヌ・ダリュなどへの手紙、さらに後年書かれた *Vie de Napoléon*, *Vie de Henry Brulard* などからスタンダールの声を拾い集め、あまりスポットをあてられないこの時期の彼の心境を浮かび上がらせている。「セルバンテス以降のいかなる Mocenigo も見なかった」稀有の歴史的な大事件に遭遇したスタンダールだが、この戦役を扱った récit de voyage(?)、メリメ等友人たちを魅了した逸話の数々（もっとも多くは彼の創作の話だったのではないかと推測されるが）をちりばめた回想録など後世に残しはしなかったのも、このようなやり方になるのはやむをえない。しかし内容が薄くなることを恐れたせいであろうか、ときに不要と思われる引用も見受けられる。

スタンダールが任務の面で実際にどういう行動をとったかなど具体的事実の詳しいところは残念ながらこの著でも扱われていない。たしかに困難で、十分な成果が上がるかどうか疑わしい資料調査が必要な課題ではあるのだが。

また野心ということをテーマにしながら「わたしはけっして野心家であったことはなかったが、1811年には自分を野心家だと思い込んでいたのだ」という『アンリ・ブリュール』の述懐に著者があまり深い意味を見ていないのを不満に思う。後年になってからのポーズといってしまうとそれまでだが、アンリ・パールという人は最も野心のただなかにいるように見えるときでさえ、世俗的な意味での利害関係を超越したようなところが、たしかにある人なのである。

書評

C. W. Thompson, *Lamuel Fille du Feu Essai sur Stendhal et Énergie*, L'Harmattan, 1997, 160 p.

柏木 治

最後の未完作品『ラミエル』が読者をもっとも当惑させる作品であることは、だれしも認めるところである。あの歓喜に満ち溢れた『パルムの僧院』のすぐ後に着想されたにもかかわらず、前作の幸福感が微塵も感じられない。逆に、スタンダールの小説にあってはどちらかといえば同様の暴力、血、残虐といった要素が、サディズム的様相を呈しつつ、いわばなまのまま出てくる。多くの場合に間接的にしか、あるいは迂回的にしか書かれなかったこれらのテーマが、この作品においては、かなり直接的に表現されるのである。少なくともそれまでは物語の中心的なテーマとしては置かれなかったもの——たとえばサンフアンの身体的特徴、小鳥の殺戮、処女を失ったヒロインが自ら拭く血など、身体性に直接関わるテーマ——が、*énergie*、破壊的暴力、快楽などのテーマ群と重なるように配置されているのだ。トンプソンの『ラミエル』論は、とくに「身体」の問題に定位しながら、これらのテーマの意味を探ろうとするのだが、それをスタンダール個人の問題に閉じこめるのではなく、社会的・文化的影響関係のなかで論証していくのである。1839年になって正面に扱えられる *énergie*, *plaisir*, *corps* の問題が、同時代の文学的影響下におけるスタンダールの意識にどのように形成されていくか、それをロマン主義時代の文脈、さらに言えば *romantisme noir* との関わりにもまで遡りながら論じてゆくのである。

こうした視角から、たとえばサンフアンにおける *bossu* のテーマが、同時代の文学との豊富な比較検証によって検討され、Mayeux という当時の人物 (*bossu* であり、かつドン・ジュアンを気取り、しかも政治的野心も持ちあわせていた) の重要性が指摘される。トンプソンはかなり前からこの時代の *bossu* に関するテーマを追いつけており (96年4月の *Herstmonceux* でのコロッケでかれが発表したのもこのテーマについてだった)、じつに豊富な資料に裏付けられた検証になっている。ラミエルの *diabolique* な *énergie* についても同様である。ラミエルという人物の創造にメラニー・ギルバールが大きく与えていることは認めながらも、著者は1830年代の文学的流行との関わりをやはり重視していく。たとえば、タルマン・ド・レオーの *Historiettes* に描かれたニノン・ド・ランクロ (スタンダールはこれを1834年に読んで称賛している) の影響を指摘するといった具合に。

1834年から1837年にかけて、バルザック、ユゴー、サンド、シェーらによって、怪物的存在、周縁的存在、異形が存在が文学の前衛的テーマを形成することになるが、著者によれば、スタンダールはこれかなり意識していたらしい。しかし、このスタンダールの反応は、その奥に、バイロンや『エジンバラ・リビュー』を通じてのイギリスロマン主義との接触（1816年）が遠因としてあるという。あらゆる人間の力を、反抗、自由へむけての飛翔へと統合することを期待して近代文明によって抑圧された原初のエネルギーを復活させること、これがイギリスロマン主義のみた夢想であったが、スタンダールは、一時的にせよ、バイロンの *satanisme* にこうしたコンフォルミズムや束縛を転覆させる力としての自由主義や *libertinage* を見ていたことは否定できない。しかも、こうした土壌はすでに、サドのみならず、ディドロ、エルヴェシウス、レチフの読書をおしてスタンダールのなかに準備されていたものだ。もちろんスタンダールはこうしたロマン的夢をそっくり信じたわけではなく、スタンダール流の巧妙なやり方でそこから切り抜けていくことになる。

トンプソンは、スタンダールのなかに読みとれる同時代のリブレスクな影響を拾い上げつつ、周囲の文学的流行としての暴力や残酷さに鋭く反応しながらも、そこから一線を画して文学的あるいは芸術的效果としての暴力的崇高性を求めるスタンダールの態度を分析してみせる。スタンダールには、一方でぞっとするものに対する好みは存在しないと言われ、他方で生来の暴力への嗜好があるとも言われる。かれは、われわれすべての人間の奥底にサディズム的・マゾヒズム的性向のあることをよく知っており、残酷な物語がもたらす戦慄をすべて否定するわけではない。むしろかれにとって問題なのは効果の問題である。要するに、残酷な崇高さが与える *énergie* の美学的・心理的效果であり、そして読者の心を凍りつかせず、夢想を阻害することのない技術である。*énergie* には瞬時にして炎のように燃え上がるものと、冷たく持続するものがあるという。前者は本能的、前社会的、前言語的な *énergie* であって、破壊的な力をもっている。これに対して後者は、前者が時間のなかで持続していくことにより生じるもので、冷たい力としての *énergie*（フリールやライヤヌスの執拗な乾いた *énergie*）である。こうした分類を経て、トンプソンはラミエルの一見理解しがたい *énergie* の発露が、いかにして崇高な暴力的破壊力へと昇華していくかを読み解こうとしているようにみえる。

サド・マゾヒズムの傾向が明白なこの小説は、ひたすらリビドーの次元へと下降してられることが多いけれども（たとえば Ph. Berthier, *Lamiel ou la boîte de Pandore*, 1994）、この試論は、この作品に現れるテーマのそれぞれを同時代的文脈のなかに置き戻し、そこから特殊性を抽出しようとしている点で評価すべき部分を多く含んでいるというべきだろう。使用されている資料も興味深い。ただ、身体の問題をこれほど論じながら、小説家自身の体力の衰え（老化）との関係をどちらかといえば副次的な要素として考えているようだ。しかし、この時期にいたって身体の問題がこれほど浮上してくるのは、老いに対する実存的問題が深く関わっているのはずで、このところスタンダールにおける「老い」飲む問題が気になりだしている譯者としては、この点の掘り下げがもう少しあればという気がしないでもなかった。

スタンダール研究者・専門家のためのインターネット版情報誌

Le Courier Stendhal 創刊のお知らせ

粕谷 祐己

フランスのスタンダール・サイトの製作者 Jean-Yves Reyssset 氏が e-mail を利用したインターネット版スタンダール情報誌をやってみたいと言い出してから 1 年くらいになるでしょうか。いよいよ創刊の態勢が整ってきたことを大変よろこばしく思います。

スタンダールの専門誌として現在 *L'Année Stendhal* が創刊され、*H.B.* ももうすぐ創刊されるかという段階であるわけですが、両方とも年刊で細かい情報の迅速な伝達には全く不向きです。

インターネットの発達には、文学研究の実際の場に画期的な効果をもたらすことができます。ともすれば非常に閉じた世界になりがらだった研究界が、インターネット雑誌によってより開かれたものとして成長・発展していくことが期待されるのです。

既に Victor Del Litto, Philippe Berthier, Gerald Rannaud といった先生方も Reyssset 氏の試みの趣旨に賛同し協力を約束しておられます。

Reyssset 氏の予定として *Le Courier Stendhal* の内容は、諸学会や Association des Amis de Stendhal の月例研究会における研究発表の要約の紹介、スタンダール関係の出来事、行事の報告、読者からの質問コーナー、そして研究論文などになるということです。

とりあえず e-mail アドレスをお持ちであれば加入できます。当分の間無料です。ご希望の方は Reyssset 氏のサイト：

<http://www.alpes-net.fr/~reysset/>

で案内をご覧になり、彼のアドレス：

reysset@alpes-net.fr

に加入を希望する旨 e-mail でお送りください (HTML 形式で送られてきますので、Netscape、Internet Explorer のメーラー機能を使われるか、または受けたメールをローカルファイルに落として上記のブラウザでご覧下さい)。

(1998年3月26日)

研究活動報告（1996年4月1日～1998年3月31日）

（今回ご報告いただいたもので、スタンダールに関するものに限って掲載させていただきました。また、本研究会での発表要旨等、『会報』に掲載のものについては省略させていただきました。ご了承ください。）

井出 勉

- ・「スタンダールにおける窓への愛と美学——《遊歩する》パリジャン：オクターヴとリュシアン——」、『名古屋聖書短期大学紀要』第17号、1997年3月
- ・「スタンダールと匂い」、『名古屋聖書短期大学紀要』第18号、1998年3月

岩本 和子

- ・「アンリ・ペールとその妹ポーリーヌ」(7)、『流域』第41号、青山社、1996年6月
- ・「インテルメッツォ」、『流域』第42号、青山社、1996年9月
- ・「アンリ・ペールとその妹ポーリーヌ」(8)、『流域』第43号、青山社、1997年4月
- ・「アンリ・ペールとその妹ポーリーヌ」(9)、『流域』第44号、青山社、1997年11月

宇田川 和夫

- ・「スタンダール『恋愛論』読解のための一つの試み——複数の序文と自作批評を手掛かりにして——」、『日本大学経済学部研究紀要』第21号、1995年10月20日

内田 善孝

- ・「『リパのサンフランチェスコ教会』の手稿研究」(Etude sur le manuscrit de « San Francesco a ripa »)、『成蹊大学一般研究報告』第28巻第3分冊、1996年7月

梶野 吉郎

- ・「Figure de Romanesque 2 LE STYLE STENDHALIEN DANS SAN FRANCESCO A RIPA」、『北海道大学言語文化部紀要』第29号、1996年
- ・「スタンダールと革命」、札幌日仏協会編『フランス革命の光と闇』、勁草書房、1997年

柏木 治

- ・「Lucien Leuwen から Brulard にいたる政治的文脈(II)」、『関西大学文学論集』第46巻第3号、pp. 51-71、1996年12月

粕谷 祐己

- ・「スタンダールにおけるイタリア性について」、『Mare nostrum』(地中海文化研究会報告)第8号、1996年12月
- ・「L'évêque d'Agde donnant la bénédiction ---- Sur la représentation de l'intériorité chez Stendhal ----», *Etudes de Langue et Littérature françaises*, no 70, Société japonaise de Langue et Littérature françaises, mars 1997
- ・「« Illustre parfaite », « sympathie » et « sublime » chez Stendhal », *Studies and Essays, Language and Literature*, no 17, 金沢大学文学部、1997年3月

金子 守

- ・「Stendhal と Balzac にみられる創作技法について」、『愛知学院大学教養部紀要』第45巻第2号、1997年11月25日

河野 英二

- ・スタンダールにおける『説』の諸問題、『関東支部論集』第5号、日本フランス語フランス

文学会関東支部、1997年1月

栗須 公正

- ・「アンドリアヌ『回想録』とスタンダール——マチルドとメッテルニッヒの人物像をめぐって——」、『アカデミア』（南山大学）文学・語学編、第61号、1996年9月、pp. 283-304
- ・「La création de *La Chartreuse de Parme* et quelques "sources" françaises », *H.B., revue internationale d'études stendhaliennes*, SPEC (France), 1997, no1, pp. 23-35.

島本 孝治

- ・「ジャン・プレヴォー著『赤と黒』について」（翻訳、上・下）、『島大言語文化』第1号、第2号、1996年7月、12月
- ・「『アンリ・ブリュールの生涯』草稿研究——intermède——」（研究ノート）、『島大言語文化』第3号、1997年7月

下川 茂

- ・「『赤と黒』とラシーヌの『フェードル』」、『立命館文学』第551号、1997年11月

杉本 圭子

- ・「Le genre du journal de voyage : étude sur les *Mémoires d'un Touriste* », Mémoire de D.E.A., soutenu le 1er octobre 1997 à la Sorbonne Nouvelle, sous la direction de Philippe Berthier, 73 p.
- ・「旅行記というジャンル——『ある旅行者の手記』をめぐって——」、『仏語仏文学研究』第17号、東京大学仏語仏文学研究会、pp. 41-67、1998年3月15日

鈴木 昭一郎

- ・*Stendhal et le théâtre*, préface de V. Del Litto, 1 vol, in-8o, 280 p. Éditions CIRVI, Moncalieri (Italie), ISBN 88-7760-203-X, gennaio 1998

高木 信宏

- ・「ジューリアとの恋——スタンダール『社会的地位』の創作をめぐって——」、『ステラ』第15号、九州大学フランス語フランス文学研究会、1996年7月1日
- ・「『リュシアン・ルーヴェン』における『衣裳』」、『ステラ』第16号、九州大学フランス語フランス文学研究会、1997年7月1日

寺西 暢子

- ・「La Narration des moments de bonheur dans l'oeuvre romanesque de Stendhal (1) ---- Réflexions sur le bonheur ---- », 『仏文研究』XXVII、京都大学フランス語フランス文学研究会、pp. 123-142、1996年9月1日
- ・「Comment sont racontés les moments de bonheur dans l'oeuvre romanesque de Stendhal (4) ---- « Milan en 1796 » ---- », 『人文論集』no 47-2、静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告、pp. 167-186、1997年1月31日
- ・「愛の手紙——スタンダールの『恋愛書簡』に寄せて——」、『仏文研究』XXVIII、京都大学フランス語フランス文学研究会、pp. 25-52、1997年9月1日

南 玲子

- ・「スタンダールの南北観」（Le Midi et le Nord chez Stendhal）、修士論文、東京大学大学院総合文化研究科提出、1997年12月

編集後記

『会報』第8号をお届けします。

今回からあらたに書評・新刊紹介のページを設けました。お忙しいなか、原稿をお寄せ下さった会員諸氏に感謝いたします。

今年最初の例会では、三月にデル・リット先生に会ってこられたばかりの鈴木昭一郎先生に、会見の模様をお話いただきました。三十年にわたる思い出をまじえながら、一語一語噛みしめるように語られたそのお話はたいへん感動的で、今回「特別寄稿」としてまとめていただきました。

フランスでは、研究誌 *L'Année STENDHAL* につづき、先頃 *H.B.* も創刊されました。栗須公正先生のご論考が掲載されております。また、Jean-Yves Reyssset 氏によるインターネット情報ページ *Courrier STEDHAL* も（これには粕谷祐己氏が随分協力されています）、つい先日から配信されています。スタンダール研究の状況は、先年からの活況がそのまま続いているようです。

今後とも『会報』の充実にむけて、情報・提言をお寄せください。書評・新刊紹介コーナーへの投稿もよろしくお願い申し上げます。投稿して下さる方は来年の一月末までに事務局までお知らせください。実際原稿締切は三月末あたりを予定しています。

(柏木 記)